2020年度　第22回　愛恵エッセイ受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

～ 新型コロナウイルスって何 ～

公益財団法人

愛 恵 福 祉 支 援 財 団

2020年度　第22回　愛恵エッセイ賞　受賞作品集

“豊かな福祉社会を創るために”

～ 新型コロナウイルスって何 ～

公益財団法人

愛恵福祉支援財団

僕はあまり人が好きじゃない
僕はすこし世界がこわい
僕は愚鈍で生きるのが下手だ

なのに生きたい
縋りたい
救いの光があると信じたい

そんな自分を許されたい
そんな自分を許したい
自分を救いたい

救ってもいい世界にしたい

光がある世界がいい
優しい世界がいい
優しい世界にしたい

僕は、夢見る
そして、走る

「今行くよ」

表紙・詩　土田 千恵

2020年度　第22回　愛恵エッセイ賞 受賞作品集 《目　次》

“豊かな福祉社会を創るために”
～ 新型コロナウイルスって何 ～

「理事長のことば」…… （4）

■ 学生の部

〔最優秀賞〕

・相手と向き合う……阿部　百々（6）

〔優秀賞〕

・高齢者に優しい未来を……山田つぐみ（9）

〔佳作〕

・思いやりをもって……小野寺佑佳（12）

・もっと豊かな福祉社会を創るには……唐沢　瑛奈（15）

■ 専門職の部

〔佳作〕

・私の答え……新井美納理（20）

・長い闘い……岡本　千春（23）

■ 一般の部

〔最優秀賞〕

・眼と声と笑顔……東　のぶこ（28）

〔優秀賞〕

・環境が人を変える……金谷　祥枝（31）

・STAY HOME ……庄司美奈子（34）

〔佳作〕

・母のホーム入所顛末記……森屋多美子（37）

・介護と新しい日常……外﨑　　隆（40）

・みえないウイルスで見えたもの……小林　浩子（42）

※作品において用語が統一されていませんが原文を尊重しました。

あとがき…… （45）

ごあいさつ

公益財団法人　愛恵福祉支援財団
理事長　**遠藤久江**

目指すものや、希望がもてれば何事につけ、そこそこ我慢もし、耐えることができるものです。

そのことから、新しいもの、意外な創造が生まれてくることがあります。

昨年来、突然に襲ってきたのが新型コロナウイルス、その感染症はいわゆる世界のパンデミック、人を選ばず死の恐怖を突き付けてきました。

私たちの生活は緊張感の中で、近づかない、話さない、触れ合わないなどの生活習慣を新たにし、避難してきました。まだまだ先が見えない状況が続いていくことでしょう。

このような経験をするなか、絞り出すように「ことば」をつむぎ「愛恵エッセイ」に表してくださいました。

状況に埋没することなく、困難を超えた、来るべき時を語ることによって、新しい生活への期待や新たな幸せのあるだろうことを伝えてくれる作品がありました。

豊かな社会福祉の創造は次のビジョンなどを描くことからも動機つけられるものもあるのではないかと思えます。

すでに10年過ぎましたが、あの東日本大震災の被害、困難を乗り越えていくなかで支えになったことは「語る」「聞く」があったからとききました。

「愛恵エッセイ」にご応募くださったみなさまの、ご健勝を記念させていただきます。

2021年2月

学 生 の 部

■最優秀賞

相手と向き合う …… 阿部　百々

■優秀賞

高齢者に優しい未来を…… 山田つぐみ

■佳作

思いやりをもって…… 小野寺佑佳
もっと豊かな福祉社会を創るには…… 唐沢　瑛奈

■最優秀賞

相手と向き合う

阿部百々

福祉ってなんだろうと考えたとき、一番初めに思い浮かんだのは私の妹でした。妹は発達障がいをもっており、家からバスで通える程の距離にある特別支援学校で頑張っています。もちろんのことですが、その特別支援学校には発達障がいの子だけがいるという訳ではありません。軽度から重度の身体障がいまた知的障がいなど、みんながみんな同じ障がいをもっていることはなく、それぞれ違った個性もあります。手を使うことができない、足を使うことができない、言葉を理解することが難しいという風に、それぞれに異なる困難が生じています。そのため、この子はどんな子なのだろう、どのような障がいや困難があるのだろうということを第一に考え、一人ひとり大切に向き合いながら相手を理解する必要があると考えます。

この間、私の妹が私に向かって言ってきたことがあります。それは、「障がい者って思われたくない」という言葉です。たった一言でしたが、私にはすごく重く、考えさせられるような一言に聞こえました。なぜ障がい者と思われることが嫌なのか、なぜいきなりそのようなことを私に言ってきたのだろうか、たくさんたくさん考えました。少しでも妹の思いを理解し、向き合おうと頑張りました。その結果、妹の立場になって考えることが重要なのだと気がつきました。妹の立場で考えるなど言われたところで、どんな感じで考えればよいのか分からないと思います。詳しい説明をすると、自分自

身が障がい者であることを想定するということです。もし自分が障がい者だったら、悔しい、はずかしい、怖いという気持ちになると思います。きっと私の妹が発した「障がい者と思われたくない」という言葉の中には、私が感じとった気持ちと同じ気持ちが隠れているのではないでしょうか。

私は自分が感じた気持ちと、妹の言葉に隠された気持ちについて深く考えてみることにしました。きっと妹が発したあの言葉には、私が感じた気持ち以外にもさまざまな思いが込められていると思います。過去に妹と話した内容を思い出しながら考えたところ、ふと頭に浮かんだのです。「頑張って覚えて、頑張って勉強しているのに、すぐ忘れちゃう。お姉ちゃんみたいにできないのがつらい。」彼女にとっての言葉は、悔しい感情の表れだと思います。私だってもちろん、他の子と同じようなことができないとなったとき、自分を責め悔やむはずです。また、妹はオシャレが大好きで、少し遅れているだけであり、周りの女の子と同じなのです。しかし、障がい者と知られたら、他の人と違うって思われる、妹にとってこのことがとても恥をかくことにつながってしまいます。

私は、「障がい者って思われたくない」という言葉に隠された気持ちで最も重要視することは、怖いという気持ちだと考えます。なぜかというと、この感情は周りの人たちにいじめられてしまう、差別されてしまうという思いから来ている感情だからです。

今、世界は新型コロナウイルスと戦っています。その中で、学校に通って勉強する子たちが感染してしまうということが、残念ながら起こってしまっているのです。その子たちはその後どうなってしまうのでしょうか。恐らく、ほとんどの子たちが学校に通えない状態が続くと思います。新型コロナウイルスに感染した子たちの心の

中には、先ほど話した私の妹の気持ちと同じようなものが隠れているのではないでしょうか。なんで自分が新型コロナウイルスに感染してしまったのだろうか、他の人ではなく自分だけがこんなつらい経験をしなくちゃならいのかという悔しい感情は少なくとも心の中にあると思います。また、感染者というだけで、周りと違う子のように扱う社会。このことによって、感染者と知られるだけで強いはずかしさが込み上げてくるでしょう。

私は、妹の言葉に隠された気持ちで重要視することは、怖いという気持ちだと伝えました。この怖いという気持ちの背景には、いじめや差別が関わっていると考えます。これは、新型コロナウイルスの感染者も同じでしょう。自分が感染したら、周りの人たちから差別的な扱いを受けることになるかもしれない。コロナに感染したあと、完治したとしても学校に通うことは苦であり、たとえ行けたとしても今まで通りの生活はできないかもしれない。新型コロナウイルスに感染した子たちは、こういった辛い気持ちを抱えています。私はこのような気持ちを少しでも柔らげるためにまずは、その子と向き合い、安心していただけるよう配慮することが大切だと考えました。

これからの社会をより良くするためには相手と向き合い、支えになるよう工夫する必要があります。相手の立場に立って考えられるような人が増え、支え合うことができる社会になってほしいです。

（群馬県立吾妻中央高等学校　福祉科　３年）

■ 優 秀 賞

高齢者に優しい未来を

山 田 つ ぐ み

私は現在、福祉について学べる学校に通っています。そこで介護の基本について学んだり、介護老人福祉施設や介護老人保健施設などのさまざまな施設で、自習を行ってきました。介護の知識や技術だけでなく、人間の思いやりや温もり、優しさなどを学ぶことができました。

高校生になって高齢者の方と関わる機会がたくさんあり、自分がすごく成長できたように感じました。ある施設の職員の方に、その人の行動だけで判断するのではなく、なぜその人がその行動を取ったのかなど、その人の思いを知ることが大切だと教えていただきました。それは高齢者の方だけではなく、私の家族や友達も同じようにその人の思いをしっかり知ろうと思えました。

私の地域では、高齢者の方がたくさんいますが、関わる機会がどんどん減ってしまっているような気がします。私が小学生の頃は、高齢者の方に教えてもらいながら、野菜を収穫したり、田植えを一緒に行っていました。その地域の伝統を受け継いでいくのはすごく大切だと思いました。この先もこういう行事は行われてほしいです。

高校生になった私は、地域の高齢者の方と関わるために、ボランティア活動に参加しました。老人ホームのお祭りに、ボランティアとして参加させていただきました。高齢者の方と一緒にお話をしたり、一緒に屋台の食べ物を食べたりして、とても楽しかったです。高齢者の方とお祭りができる機会なんてなかなかないので、すごく

貴重な体験でした。介護をする人が高齢者の方を支えているように思いますが、介護をする人も高齢者の方に支えられていると思います。高齢者の方と話しているとパワーがもらえるような気がして、元気がでます。昔の知識を教えてもらえるし、すごく勉強になります。お互いが支え合いながら生きているんだとなと感じました。

今、日本の高齢者の人口は年々増加しています。私はそれが悪いことだと思いません。なぜなら、それほど日本の医療が発達している証拠だからです。しかし、それに連れて高齢者が傷つけられる事件も増加しています。私はそんな今だからこそ自分の身近にいる高齢者を大切にしたいと考えました。人間は誰しも歳を取ったら介護が必要になります。だからこそお互いに助け合わなければいけないと感じました。

今は新型コロナウイルスが流行していて、実際に介護施設で高齢者の方が集団感染してしまったなどといったニュースも多くあります。若者より高齢者の方のほうが命の危険があるので、感染予防をしっかりしなければいけないと思います。外から帰ってきたら、手洗いうがい手指消毒を習慣づけることは本当に大切なんだと思い知らせれました。

新型コロナウイルスが流行し、自粛期間が長く、球技大会や体育祭など楽しみにしていた行事がなくなってしまいました。高校生活最後の年なので、すごく悔しい反面、これ以上身近な人が感染しないためにも、しょうがないのかなという気持ちもありました。命より大切なものはありません。もし自分の大切な人が亡くなってしまったら、一生後悔すると思うので、感染対策は心がけました。

次世代を担う私たちが高齢者の方のことを第一に考えて、一人ひとりの思いを尊重し、何をしてあげることがその人にとって安心し

て穏やかに生活できるかを考えることが大切であると思いました。また、高齢者の方を、よく観察し小さなことにも気づいて、一人ひとりの習慣に合わせて高齢者の方が自分らしく生活できるようにお手伝いすることも大切であると思いました。

ニュースなどを見ると、今の日本にはもっと介護をする人が必要だなと思います。介護が必要になる高齢者の方はどんどん増えていくと思うし、家族だけで介護をするのは難しいし、とても負担がかかります。今の高校生のわたしにできることは限られているけど、ボランティアや実習で高齢者の方を笑顔にしたいです。そして、高齢者の方に優しい未来を創っていきたいです。

（群馬県立吾妻中央高等学校　福祉科　３年）

■佳作

思いやりをもって

小野寺佑佳

私が思う豊かな福祉社会は一人ひとりが思いやりを持って生活をしていることだと思います。なぜなら、介護・看護などは、すべて思いやりがないとできないものだと思うからです。

私は介護施設に実習に行った際ある利用者の方と施設の方の場面が印象に残りました。しかし、施設の職員の方は、「なぜ、お風呂に入りたくないのですか」などと、理由を聞いたり、入浴をしたくない理由を聞いて、「それはわかります」などと、無理に入浴を説得するのではなく、理由を聞き、利用者の方に寄り添って介護をしていました。思いやりがあれば、人の心を動かすこともできるのだと知ることができました。

最近でも、クラスターが続出している新型コロナウィルスの影響で、約３ヶ月ほどの自粛期間があった際、仕事を休まなくてはならない人がたくさんいました。そんな中、介護職の方や医療関係者の方は休むことが難しいためさまざまな問題があったことをニュースで知りました。介護福祉施設の中で集団クラスターが発生したり、医療関係の方たちは、休みがなく、労働時間が長くなり、仕事を辞める人が続出したということを知りました。そんな中人々は、「あの人がコロナにかかって、あの施設に行ったから広まったのではないか」「こんなコロナが流行している時期に辞めるのはおかしい」などと、言っていると知ってとても悲しく思いました。

また、小中学校や高校などでも、「あの子、コロナに感染しているらしいよ」「感染者は近づくな」などといった噂やいじめが広がっているということもありました。そして、県外ナンバーを付けている車に、「出ていけ」「コロナが広まっているのにどういうつもりなんだ」などと書いた紙を貼るという行動をしている人もいるということを知りました。

今、世界中の人々は新型コロナウイルスと戦っています。そんな中、こんな亀裂があってよいのでしょうか。

介護や医療は人との思いやりがないと出来ないものであると思います。しかし、今の世界は、思いやりとはとてもかけ離れていて、介護や医療の役割を充分に発揮することがとても難しいと思います。また、新型コロナウイルスの影響で小中学校・高校でいじめや噂が流行しているというのは、決してあってはならないと思います。そのせいで学校を辞めた人もいると聞きました。こんなことがあってよいのでしょうか。

私たちにできることは、まず人への感謝や思いやりの心を持つことだと思います。例えば、嘘の噂を信じない、流されないということにもつながると思います。また、ほんの小さなことでもいいのです。例えば、セブンで買い物して商品を受け取るときは「ありがとうございます」などと一言感謝の気持ちを添えるということも良いと思います。また、困っている人がいたら声をかけてみるなど、色々なところで実践することができると思います。

このようなことを一人ひとりが気をつけていれば、誰もが傷つくことなく優しい心を持てると思います。新型コロナウイルスに勝つためには人々の助け合いが大事だと思います。

私はこれから、この新型コロナウイルスと一緒に生活して行く中で、三つのことについて気をつけていこうと思いました。

一つ目は、人への感謝の気持ちを忘れないということです。普段から気をつけてはいるのですが、買い物をしたときにレジに出すときは、「お願いします」と言って、商品を受け取る時にはありがとうございますなどとしっかりお礼を言うようにしようと思いました。

二つ目は、正しい情報を整理して知ることです。新型コロナウイルスにかかわらず、噂をすぐに受け取るのではなく自分で調べた正確な情報を知識として知っておこうと思いました。

三つめは、困っている人がいたら助けるということです。高校2年生の時、切符の買い方が分からないと言っていた人に買う方法を教えたら感謝してもらうことができました。そのため、これからも、人に感謝してもらえるようなことを積極的にしていこうと思いました。

皆さんも新型コロナウイルスと戦い、豊かな福祉社会を創るために思いやりを持って生活して行きましょう。

（群馬県立吾妻中央高等学校　福祉科　3年）

■佳作

もっと豊かな福祉社会を創るには

唐沢　瑛奈

私は福祉課を通して実習やボランティアを活動で若い人から高齢者、障がいを持つ方々と接して色々思ったことや感じたことがありました 。

まず一つ目は自分のできる範囲で手を差し伸べることが大切だと思います。例えば､車椅子に座っている人が大通りを通っていたら、目的地まで押してあげたり、周りの人達に車椅子が通ることを呼びかけて道を開けてもらうことが大切なのではと考えました。声をかけられることが嫌と思う方も中にはいるかもしれないけれど､「大丈夫ですか｡」と言われて身体に障がいがある人や高齢者の方は基本的には嬉しいのかなと思います。周りに困っている人がいたら、自分から声をかけて手を差し伸べていきたいです 。

二つ目は差別をしないことです。自分たちとは違うというだけで身体や知的障がいを持つ人を差別するのは違うのではないかと思います。障がいを持つ人は障がいがあると伝えるといじめが起こりそうで怖いと思ったり、障がいを持っているということから特別視されるのは嫌なのではないかと思います。実際に障がいを持っている人がいじめられるという事を聞いたことがあるので、障がいについて詳しく知ることでその人の持つ障がいを理解できていじめが減るのではないかと思います。しかし障がいについて理解することができても、その人のことを特別扱いするのではなく、その人のことを尊重して周りの人と同じというように接して行くのが大切だと思い

ます。

コロナウィルスに感染した人にでも同じことが言えるのではないかと思います。

今現在コロナウィルスは世界中ではやっており、クラスターが発生したり、死亡者が出たというニュースを毎日のように聞きます。私が生まれてから今までで、コロナウィルスのような大きな病気が流行したことは聞いたことがなくてニュースを見て驚きました。コロナウイルスにかかりたくて感染したという人はめったに居ないと思います。また無自覚で、分からずにいて感染を広げてしまうという人が中にはいるかもしれません。一度かかった人には近づきたくはないと思う人は必ずいると思います。しかし、一度かかったからといって、ずっとウイルスを持っているとは分からないので、そこからいじめ、差別をするのは違うと思います。コロナウィルスにかかってしまった事実を受け止めてあげ、今までどうりに接して行くのが良いと思いました。

三つ目は高齢者や障がいを持つ方に寄り添ってあげることです。高齢者の方が年を重ねるにつれ身体が動かなくなり、養護者や施設の方の手を借りるようになります。そこから、自分は必要なのか、本当は居ない方がいいのかといったマイナスな考え方をするようになります。障がいをもっている方も同じで、自分なんてと考える方も少なからず居るとは思います。だからこそ、その人に寄り添い、その方が大切でいなくてはならない存在ということを伝えてあげるのが大切だと思いました。寄り添ってあげることで、自分は必要な存在で大切な人ということが分かり、マイナスな考えからプラスな思考に変わっていくと思います。

四つ目は知識をつけることが大切ということです。介助するにあ

たって知識がなければ、何をしたらよいか、また、知識がないままに介助してしまい、大怪我を負わせてしまったということが起こらないためにもしっかり学んだ方がいいと思います。知識があれば介助をスムーズに行え、その人に必要なことがわかると思います。

またコロナウィルスの知識も身につけておけばコロナウィルスがどのようにして感染して行くのかが分かるようになります。感染しないためにも積極的に知識を付けていくことが大切だと考えました。

私は今よりもっと豊かな福祉社会を創るのには、手を差し伸べてあげること、自分と違うからといって差別をしないこと、障がい者や高齢者に寄り添ってあげること、しっかりとした知識をつけることが大切だと思いました。困っている人がいたらその人の課題を解決していけるよう頑張って少しでも豊かな福祉社会を創るお手伝いをしたいです。

（群馬県立吾妻中央高等学校　福祉科　３年）

専 門 職 の 部

■佳作

私の答え…… 新井美納理
長い闘い…… 岡本　千春

■ 佳 作

私の答え

新 井 美 納 理

「コロナのせいで全部むちゃくちゃやな」

利用者さんがデイルームのテレビを見て言った。午前のニュース番組が前日の国内新規感染者数を報道して、利用者さんがしかめ面をする。この半年毎日のようにある光景だ。

「でも、悪いことばかりじゃないと思いますよ」

需要が高まった商品やサービスもあるし、創作意欲を刺激されたクリエイターやアーティストもいる。そう思って私は介護職員らしからぬ返答をしたが、マスク越しの私の声が聞こえなかったのか、その利用者さんの反応はなかった。このマスク越しの会話は私も辟易している。

私は今年の4月、22年間暮らした新潟を離れて、兵庫県姫路市の離島、家島という町に移住した。島内の高齢者デイサービスに就職し、介護職員として働いている。今年3月に卒業した大学は人文学部の単科大学で、私は留学や海外ボランティアといった国際交流がしたくて入学した。気がついたら4年間のほとんどは過疎集落や地元のシャッター商店街で地域住民と交流するフィールドワークばかりしていた。今暮らしている町も、4年生の9月に防災に関する現地学習で訪れたことがきっかけだ。

卒業した大学には福祉を学ぶ学科があったし、ソーシャルワーカーを目指している友達とも出会った。しかし福祉については恥ずかしながら一切学んだことがなかった。就活中も、福祉系の仕事が

自分に合っているかもしれないと思いながらも、しんどそうだなという偏見を持っていたし、グラフィックデザイナーやクリエイティブ職志望だったために選択肢に入っていなかった。

そんな私を採用してくださった今の職場に出会えたのは今年の2月だ。島の方に紹介していただき、今働いている職場を見学させてもらった。その日に私は「ここだ」と感じた。年齢は90代でも若々しい笑顔で雑談したり、趣味に没頭したりする利用者さんと、利用者さんを家族のように思って接する職員の関係性に強く感動した。

私もこの人たちみたいになりたいと思い、働きたいという気持ちを拙い言葉でアピールした。突然やって来た得体の知れない若者を快く受け入れてくださった島の方達には感謝してもしきれない。

コロナ禍と同時に始まった新天地の生活だった。海で隔たれている穏やかなこの家島も、コロナの影響がないわけでない。1年前初めてに訪れた時にはなかったピリッとした雰囲気が少しある。

数ヶ月前と比べたら現在はかなり薄れたように感じるが、コロナ禍の日本中に立ち込めるぴりぴりムードは「みんな我慢しているのになんであなたたちだけ」が主成分だと感じる。医療従事者や、感染リスクが高い高齢者や障害を持っている人たちと毎日密接に関わる介護職、福祉職の人たちは、まだまだ「自粛」という名の目に見えない頑丈な鎖に縛られて過こしている。

コロナに関する情報は、毎日、次々と入れ替わり更新されていく。テレビ番組に映る饒舌な司会者や才色兼備な俳優やモデルのコメント、見知らぬ人たちの根拠不明なツイートを真に受けても意味がない。しかしそれらに反応してしまうほど、私たちは情報メディアに毒されざるを得ない状況に置かれている。

つい数日前、とある利用者さんと話していた時にコロナの話題に

触れた。「ここ半年でこんな病気が流行っていて、世界中が大変なんですよ」とコロナの話をしたら、利用者さんは「ほうか。ほんまぁ。」と驚くような反応をしたが、またすぐ穏やかな顔に戻った。「知らない幸せ」というのはまさにこのことか、と私は意表を突かれた。

私たちが本当に求めているのは、自分の町で発表された感染者の個人情報でもなく、感染者数の速報でもなく、ステイホームを充実させる目新しい商品でもない。今大切だと思うものだ。

だからこそ私たちは近くにいた大切な人と会いづらくなったと気づいた瞬間に、切なさを感じ、自粛せず会いに行く人たちを羨む。しかし、今私たちにとって大切なものは、実は触れられるほど近くに確かにある。それはコロナ禍以前も現在も同じである。画面越しでいいからまた話したい人がいるということは、私たちは幸せだということだ。私たちは大きな犠牲を払ってそれに気づくことができた。

帰省ができない苦しさも、恋人に会えない寂しさも、取りやめになった友達との旅行も、全ては必要だった。犠牲は計り知れないほど大きいが、それと同等に大切なことに私たちはようやく気がついた。豊かな福祉社会を創るために、私たちはまず、すぐ目の前にある大切なものに気付く必要がある。

私が暮らしている家島は、自分が求めて来た場所だ。しかし、大きな環境の変化に慣れるのにはとにかく時間がかかった。今でも決しで慣れたとは言えないけれど、幸運にも、優しく素晴らしい人たちに支えられて充実した毎日を生きている。会いたい人に会えない今だからこそ、目の前の景色が胸を震わせるほど大切に思う。

（児童養護施設元職員／児童相談所非常勤職員）

■ 佳 作

長い闘い

岡 本 千 春

「マスクしとったら聞こえんで」

高齢者の一人がこう言った。

新型コロナウィルスの感染懸念で、私の勤める介護施設でもマスク着用が義務付けられた。

介護施設に入居している高齢者のほとんどに認知が入っている。それだけでなく、どの人にも何がしかの既往症を抱えている。

そうした病気から来る後遺症でコミュニケニション等がとりにくい高齢者も多々いる。

だから、耳が遠い高齢者や、何度となく同じことを声張り上げて話さなければいけない高齢者には、その耳元に「密接」に近づいて話す。

また車椅子からベットへ体を「密着」させて、移乗しなくてはいけない。

入浴となると、裸の身体に「直に」関わって洗身洗髪をしていく。

とにかく「密」ならざるを得ない。

だが、このコロナウィルスは「密」を避けなければならない。

しかもマスク着用となると、聞き取れないし、また顔の表情もわからない。

当然、高齢者からは、

「何言いよるんかわからん」

になってしまう。

介護するこちら側の表情がわからないように、高齢者の方々にマスク着用を義務付けると、介護される側の表情を知ることもできない、となればコミュニケーションが取れない。

何より

「息苦しいていけん」

大抵の高齢者はすぐに外す。

そこで施設では毎日の手洗い、うがいの励行を義務付けた。

そして施設内だけはマスクの着用をしないことにした。

一人一人の状態を確認することができない、では介護はできないからだ。

けれども排せつ介助や食事介助、さらに入浴介助と介護は「濃厚接触」しないといけない仕事である。

それをしないということでは介護は成り立たない。

体調に万全に気を配り、職員一同、緊張感の中、介護をしていった。

幸い施設では職員にも高齢者の方々にも発熱者はなく、体調不良を訴える人もいなかった。

まずはひと安心、と思ったのもつかの間、新型コロナウィルスでは無症状の人もいるとの報道により一層の緊張感が走った。

コロナだけでなく、冬になるとインフルエンザウィルス、そして夏の気温が上がり始めるころになると、ノロウィルスと、施設ではこの「ウィルス」との闘いは年中強いられている。

一人でもそうした感染者が出ると、特に高齢者では免疫力が弱っているだけに次々に感染が広まっていく。最後には重篤な事態に陥りかねない。

だからこそ最新の注意を払っている。

けれどもこの新型コロナウィルスに限っては、他のウィルスのようにある程度の時期が来たら終息する、というようなメドがたたない、だから余計にやっかいである。

そこで対策として、外部からの接触を極力避けることにした。
まずは家族の面会を禁止にした。

外部からのレクレーション訪問も禁止にした。

また業者等で施設に入る人達には入口に消毒スプレーを置き、除菌に務めてもらうようにした。

こうして外部からの菌の持ち込みを断つように努力した。
けれども職員は毎日勤務し、施設と家、さらに至るところに出歩き、往復している。

一番、菌を持ち込む可能性が大である。

その職員に行動制限までするということは、さすがにできない。

今は毎日の検温や手洗いでしのいでいる。

こうした菌との闘いは一過性のものではなく、これからずっと継続していかなくてはいけないだろう。

職員の誰しもが思うようになった。

なぜなら菌による感染には「飛沫感染」「空気感染」「接触感染」等があるが、どの感染も施設では起こりうる。

そこを完全にシャットアウトなどできるわけがない。

日常にも菌は存在しているわけで、その菌に抵抗力があるからこそ、私達はどうにか生きていることができる。

高齢者となるとその抵抗力が弱っている。

弱っているところに菌はやすやすと忍び込み、増殖していく。

抵抗力を強くすることは、高齢者となるとかなり難しい。

食べ物や薬で、ある程度は抵抗力をつけることができても、やは

り完全ではない。

菌を持ち込まないに越したことはないけれど、目に見えないだけに感染経路不明等のことが多々あり、防ぎようがない。

防御は最高の攻撃だともいう。

その攻撃はできないばかりか、防御も万全にはできない。

（グループホーム銀河　介護職）

一 般 の 部

■最優秀賞

眼と声と笑顔 …… 東　のぶこ

■優秀賞

環境が人を変える…… 金谷　祥枝
STAY HOME …… 庄司美奈子

■佳作

母のホーム入所顛末記 …… 森屋多美子
介護と新しい日常…… 外﨑　　隆
みえないウイルスで見えたもの …… 小林　浩子

■最優秀賞

眼と声と笑顔

東のぶこ

義姉はいつも冷静で口数も少なく、机に向かう姿は凛々しかった。その義姉は夫が、60歳で急逝すると、つかえ棒が取り払われたように崩れて行った。くずれるとはこういう時に使うのだろう。二人とも同じ国立大学の教授として切磋琢磨して来たのだろう。新人の講師と学生の結婚であった。彼女の専門は数学。1+1=2でなければならない人が年々だらしなくなり、変貌してゆく。特に退官した後は人が変わったと娘が話す。孫の世話を優先して大学に残らず、自宅で数学教室を始めた。そんな人が…80歳を前に「認知症」と診断された。その嘆きは埋もれ火になり、人をよせつけない悪循環を起こす。

娘も息子も勤務医。母の支離滅裂にうんざりして息子は親元を離れていく。小児科医の娘も母の容態に気を配るも限界がある。そんな状況をチラッと聞いて心配はしていた。…あんな立派なお姉さまが…泣けた。娘の子供達（孫）の世話をしている間は「まだらボケ」で笑いを取っていたらしいが高校大学に進学した頃はもう手遅れ症状だった。まず、ボヤを出す。水を出しっぱなし、おカネを持たないでスーパーへ、帰宅路の認知度低下。数々の忘れ物。家族の名前もおぼろげで、混乱して頭を抱える。

そんな母親を姉弟は高齢者施設に入れた。当初は親戚にも告げず、亡くなる寸前まで知らされなかった。寡黙な毎日は症状を進めた。と私には思える。言ってくれればお喋り相手くらいできたのにと思

うが誇り高い義姉にはこれで良かったのかもしれない。

そんな義姉があるスタッフだけには心を開いたとか。その施設の経理担当者 A 子さんは義姉が数学の教授だったと知って、何かと相談していい気分にさせてくれたらしい。しかも不思議なことにこと数学に関しては明快な答えが貰える。凄いと賞賛する A さん。その時の義姉の眼は、認知症患者のそれではなく満面笑顔で、しつかりした声が帰ってきたらしい。

14 年目を迎える(唄唱会)を主宰している私は音楽療法にこだわり、出張コンサートを始めたのだが、そのやり方に疑問が生まれた。

福祉施設がフィールドである。当初は板書して曲目の歴史などを講釈していたが、辞めた。いまさら「教えられることに抵抗がある」だろうと忖度したからだ。素直に「歌は人を幸せにする」を実践することを優先した。自己満足だけの活動が相手に負担感を感じさせる。観客を無視しては楽しくない。年季の入った、積み重ねた知恵袋が相手だから、おためごかしは不要だ。そして徐々に変えていく。

我々の歌の提供は添え物にして、入居者や利用者さんの経験を話してもらうことを提案した。

ピアニストだった方がうっとりさせるメロディーを巧みな指先で演奏してくれた。すごい！当人も時間が戻ったように眼がキラキラ。私はこれだ！と思い、我々が出張する時はあえて『B さんの講演会と歌を楽しむ会』にした。その頃から看護婦、食堂経営者、絵描き、茶道、教師、盆踊りの名士、幼稚園の保母、三味線の名士、パン屋、八百屋、漁師、刑事、落語家、下駄職人、花火師、大学の教授、そして刺繍の上手な主婦、など多種の経験談を話してもらう時間を作った。心理学では『回想法』に当たるのだ。人は自分の人生に誇りを持っているもの。ほとんどの方の目に力が甦り、幸せそうに相貌

を和らげる。朴訥に自分を語る人達。その姿は誇りにあふれている。わずか30分位の持ち時間も超過して現役時代の力強さを見せる。内容は魅力的だ。実技を披露してくれる人もいる。聴衆のうなずき，万雷の拍手が鳴りやまず、ステージは笑顔一色だ。

第一線を離れても刷り込まれた体験、経験は宝物なのだ。家族の都合で施設入居をしている人もいれば、私はこんなところにいる人間ではないと怒りを抱きしめている人、嫁に入れられたと被害妄想の人、いろいろだがお腹の中を吐露すれば楽になる。その程度差はあるが、講演後は、ほとんどの人がうまく仲間に溶け込むように穏やかになるようだ。眼には見えないが、良い傾向が生まれればスタッフは助かる。ほほえましい連鎖ができれば声まで若くなる。幸せな高齢者は「大きな声」で話ができて、「笑える人」と知った。

2020年2月頃から新型コロナウイルスの感染でやむを得ず、介護福祉関係の門は閉まってしまった。集団感染（クラスター）を恐れて、家族の訪問も遠慮してもらっている時期らしい。皆様お元気かしら。と時々連絡は取っているが、彼らからもらっていた元気が途絶え今は寂しい。

誰かコロナウイルスの尾っぽに鈴でもつけてくれないだろうか。まとわりつく蚊、バカでかいゴキブリ、うるさい蜂などのように存在を教えてくれたら蠅たたきで叩き殺すのだが…なんて夢を見ている。

「ね～可愛い名前のコロナちゃん、どこにいるの？」と4歳の孫がまん丸い目で声を張り上る。

「…そうね。お返事をしないってお行儀が悪いよね...」と私は笑顔を返す。幸せの一瞬だ。

（主　婦）

■ 優 秀 賞

環境が人を変える

金 谷 祥 枝

「あそこの施設にクラスターが発生したらしいよ」

私の勤務する訪問介護事業所の近くにある障害者施設で集団感染の報道があった私が担当している利用者もクラスターが発生した施設の短期入所を利用している。集団感染が発生する3日前に短期入所を利用したと家族から連絡があり、職員が動揺した。

「集団感染」「クラスター発生」などと毎日テレビを賑わせていたニュースは、どこか別のところで起こっているような感覚でしかなかったのが、すぐ近くで起こってしまうと身近な脅威になる。「短期入所施設の送迎をしました。私も感染しているかも」「送迎に使った車で、他の利用者を乗せました。大丈夫でしょうか」「38度発熱している利用者がいます。感染しているかも」と職員の動揺は連鎖反応を起こす。新型コロナウイルス感染症流行する前と現在で仕事内容が変わるわけではない。変わるとすれば感染疑いの可能性か濃厚接触者の利用者の場合だ。そうなったら訪問を断るのか職員の間で議論になる。家族がいれば訪問を中止することもできるが、独り暮らしの場合判断は難しい。訪問介護は利用者の生活全般を支えていることが多い。言い換えれば、訪問介護を中止すれば生活は立ち行かなくなる。

毎年、インフルエンザの時期に職員は予防接種をする。高齢者の中には結核の保菌者もいる。訪問介護は調理や掃除そして入浴食事介助など利用者の体に直接触れる作業も多い。常日頃から職員には

自分の健康管理も仕事のうちと言い続けてきた。今回の新型コロナウイルス感染症にも、手洗い、マスクの着用と、今までの感染症予防と大きく変わりがあるわけではない。私たち介護従事者は利用者の生活を守る義務がある。その点では医療従事者と同じだ。しかし今回の件で分かったことは「利用者の生活を整え、健康を守る」という意識の薄さだ。利用者の生活スタイルに柔軟に対応する訪問介護は、感染予防にも臨機応変に対応する必要がある。「感染するかも」と漠然と不安になるのではなく「感染しないためには、どのように対応すれば良いか」を考えていく必要がある。感染予防について正しい知識を持ち、利用者の生活を守る。訪問介護は、家庭介護の延長線上ではなく、介護のプロとして利用者の生活を支えていかなければならない。

今回の新型コロナウイルス感染症で、介護に携わるものとして弱い部分が炙り出されたと思う。ただなんとなく介護するのではなく介護のプロとして意識を持って仕事をすることを考える良い機会になったのではないかと思う。

私自身の考えを伝え、感染予防や、利用者への関わり方を職員と何度も話をする機会を持った。感染予防について勉強会を重ね、できる限り最善の対策方法を練った。しばらくすると不安しか言わなかった職員の言動が、徐々に変わり始めた。「利用者を乗せる車両は、支援が終わった後は必ず消毒液で拭き掃除、換気を徹底しましょう」「利用者ごとにエプロンは必ず交換し、訪問前後に手洗いを行うこと」職員が声かけをし、利用者や家族へも不安にさせないよう配慮ができるようになった。「感染予防の対策はどうしているのか」などの家族や利用者からの質問に対しても、相手の不安にも配慮して返答している。今まで、家庭介護の延長線上にいた職員の意識が、

新型コロナウイルス感染症によって変わった。

職員からの要望で定期的にミーティングを開催し、勉強会も定期的に行う。利用者の生活を支え守る、健康面に配慮し安心して生活できるよう支援する訪問介護は大変さもあるがやりがいも大きい。

先日、訪問介護を利用していたデイサービスで新型コロナウイルス感染者がいると情報が入る。職員は動揺することなく、保健センターに連絡し対応を行う。消毒清掃、手洗い、マスクの着用などてきぱきと指示を出す担当職員を頼もしいと感じる。環境が人を育てる。新型コロナウイルス感染症は、本当に大変な状況であることに変わりはないけれどこういう状況だからこそ学ぶこともたくさんあるのだと感じた。

（ホームヘルパー）

■ 優 秀 賞

STAY HOME

庄 司 美 奈 子

「STAY HOME」この状態が苦痛であり不幸と感じる人の方がやはり多いのだろうか？私の周りには、「STAY HOME」が救いと感じる人が少なからず存在し、かつ新しい発見がたくさんある日々であった。

私は仕事で、常に「STAY HOME」つまり、ひきこもりの状態にある不登校の子ども達と接している。その状態にあると人間は、己にのみ強く関心を向けてしまう傾向を感じる。子も親も、「学校に通えない」ことに不安や焦りを感じ、真面目な人ほど、深い自責の念を持ち毎日を過ごしている。自信のなさや無力感、もしくは不登校のきっかけとなったなんらかの理不尽への深い哀しみは、乗り越えられぬまま発酵し、強い怒りへと変わることもある。その怒りが、時に家族を含む他者や、社会への攻撃性となってあらわれることもある。または自分への攻撃となり、自傷行為や自殺未遂を繰り返すこともある。……これは、コロナ禍でＤＶや自殺が増えている、という状況と一緒ではないか。結局、福祉の対象であるところの弱者とは誰しもがなりうる「望ましい状態でいられない苦しみ」を持つ人すべてではないか、と思わされたのは発見であった。

ひきこもりの学生と話していて、「コロナ」という大義名分のもとに、学校に行かないことが堂々と認められることを喜びに感じている様子が見てとれた。「（会社や学校に）行きたいけれども、行けない」人々がたくさんいること、が彼らの心を軽くしているように

私には思えた。偏見を持っているつもりはないが、不登校児の一部には学校に行けないことに付随して、経験やコミュニケーションが不足し、「社会性」への不安、という事実はやはりあるように思う。「社会」から外れている扱いを受けてきたり、その自覚を持っている彼らは、今回の「STAY HOME」という状況を分かち合うことで「同じ社会」の一員である、という実感を持てたのではないか。「行きたいけれど行けない、って苦しいよね」と同じ気持ちで過ごしている人がたくさんいること、が喜びなのではないか。ひきこもりの人々や家族にとっては、自分を責めずに過ごせることができる恵みの季節なのかもしれない、とすら私は感じている。

また、精神的な不調を抱えている人、特に対人関係に大きなストレスを抱える人、ゆえに本来の能力やパフォーマンスを発揮できない人、発達障害、アスペルガー症候群やＡＤＨＤの症状がある方々などに、「テレワーク」は福音ではなかろうか。

かく言う私も、一時在宅勤務になった時、不愉快な上司の言動を聞かずにすんで、非常に気持ちよく効率よく仕事ができた。

コミュニケーションが大きな壁となり「社会参加」を諦めている方も多い。人間関係のストレスは、障がいの有無にかかわらず、大なり小なり皆そうであろう。健康であってもうつ病を発症してしまう人もいる。人間関係で悩むのは、それも生きることの重要なファクターのひとつではあるが、その為に、仕事や社会生活、ましてや命を奪われるほどのものではないはずである。日本は少子化にともなう労働人口の低下が懸念されている。「一億総活躍社会」という言葉もあった。「テレワーク」でそれは叶うのではないか、「無限の潜在的人財の宝庫」と希望に感じている意見も多い。

実際の現場で一緒に働く支援者や健常者の精神的・物理的負担が

軽減されることもあるだろう。むしろ「テレワーク」で双方の関係性が良好になる可能性もある。

３人の子どもを持つ職場の女性の同僚は、在宅勤務になり、保育園のお迎えの時間を気にしなくていい、小学生の子どもが帰ってくる時に家にいてあげられた、と喜んでいた。通勤時間がないだけで、ゆとりのある生活を送りながら、子育てと仕事との両立がしやすくなる面もあるだろう。

自粛期間中、不登校児達とオンラインでやりとりしていた。対面で会うと目も合わせてくれず、緘黙を貫く子ども達が、オンラインのチャットだとたくさん会話をしてくれる。デジタルネイティブの彼らは、チャットごしに電子機器の使い方を教えてくれたりもする。今まで何を考えているかわからなかった子ども達の個性が伝わってきた。この方法は癌で声帯を摘出した方や、聴覚障害者や筋委縮症などでキーボードへの入力で意思を伝える方法などと同じである。オンライン・チャット上では障がいの有無がわからず、むしろ構えることなくとれる、新たなコミュニケーションのスタンダードになり得るとも感じた。コロナ禍でますます発展したＩＯＴ技術についても、みな無限の可能性を感じているのは確かであろう。

みんなが幸せに、とは理想が過ぎる。他者への理解は、投げ出したくなるほどに難しい。多様性を受け入れたいが、あまりに異質なものは受け入れがたい、それが私の本音だ。けれど、コロナウィルスがもたらした現象は、もしや皆で同じ状況を分かち合える新しい社会への布石ではなかろうか。

（教育　不登校支援事業）

■ 佳 作

母のホーム入所顛末記

森屋多美子

退職祝いに友人からもらった三年日記。すぐ上の段、つまり去年の今日の欄を読み返してみて思った。そうか去年のちょうど今頃だったのだ。母が老人ホームに入りたいと言い出したのは。

90歳を過ぎて自分の身の回りのことを自分でするのがしんどくなった。かといって同居の息子夫婦には今までの行きがかり上、頼みづらい。唯一頼りになるのは嫁に出した娘。定年退職したこともあり、頻繁に来てくれるようになったが何と言っても娘にも姑がいる。これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

そんな思いが「私ホームに入りたい」と言わせたのだと思う。母だけでない。母の様子を見に、実家によく顔を出すようになって半年。私自身も次第に壊れていく母が不安だった。あの頃、母は口癖のように言っていた。

「バカになっちゃってしょうがない 」

「なんでこんなに長生きしちゃったんだろう 」

「私ホームに入りたい 」

認知症の診断結果も出て、要介護2の認定を受けたのを機に、デイサービスやショートステイを試してみた。思いはより強くなり、周囲も本人もそれほど言うならばと、母が希望した老人ホームに入所したのが年明け。凍てつくような季節だった。

急な坂道を登った先にある、山の中の老人ホームに母を送った帰り道、私は泣けて泣けて仕方がなかった 。

しかしそれ以降、二、三日おきに面会に行くと、思いのほか母は幸せそうだった。

「〇〇さんがねこう言ったのよ 」

「食事が美味しくてね 。毎日残さずに食べているよ 。夜もよく眠れるよ 。」

話し相手がいて、食事の支度も洗濯もしてもらえて、ゆっくり休める環境を母はとても喜んでいた。ホームの様子を笑顔で語る母に心底ホッとした。このまま穏やかな日々が過ぎてくれればといいと思っていた。

なのに、その矢先のことだ 。

「新型コロナウイルス感染防止のため面会を中止します」

わずか２ヶ月足らずで母と会えなくなった。慣れない環境で、家族と会うこともできず母はどれほど心細いだろう。認知症が一気に進んでしまうのではないだろうか。いったいこれからどうなってしまうのだろう…。

あれから７ヶ月が経つ 。

先月から、月に一度、ホームの玄関先でガラス戸越しに面会ができるようになった。

面会はできなくても、会えなかったこの期間、電話での対応をしていただいた。週に一度ほど、ホームに電話をすると、スタッフの方が母を電話口に連れて来てくださり、会話できる。もちろん以前のようなわけにはいかないが、母の声を生で聴くことができるだけでもありがたい 。

手紙を書き、母からも返事をもらった。母から手紙をもらうなんて何年ぶりだろう。文字はたどたどしくて漢字の間違いもあって、若い頃とはまるっきり違うが、それでも母の字だ。きっとスタッフ

の方がそばについていて、丁寧に指示してくださったのだろう。母の子どものような笑顔の写真も添えられていて、思わず胸に抱きしめた。

この半年間、歯がゆい思いも多々したが、ホームのスタッフの方々には感謝の思いでいっぱいだ。その御苦労はどれほどのものだったのだろうと思いを馳せるたび、ただただ頭が下がる。

感染防止に苦心し、日々神経をすり減らし、お年寄りたちの状況に細心の注意を払う。身体もそうだが、精神的な寂しさや変化が、入居者たちの人に与える影響は計り知れないものがあるだろう。コロナ禍の環境や心の変化にどれだけ気を使っていただいたことか。

10月に入って1ヶ月ぶりに会った母はこざっぱり髪も切っていただき元気そうだった。時々、認知症が進んでいるんだなと思われる言葉が出てきて切なくなったがそれでもよくこの状況で落ち着いていてくれるものだと思う。この日訪れた家族一人ひとりとちゃんと話ができる母の姿に、今日一日の安堵の想いで帰路に就いた。この先どうなるか分からないが一日一日、ただ母がこうしていてくれるだけで幸せだ。

それにしてもいったいいつまでコロナ禍は続くのだろう。「Withコロナ」「新しい生活様式」――。確かに私たちは、考え方を変えていかなければならないのだろうが、コロナは受け入れられるものでは決してない。人のふれあいをたち命や仕事や夢、大切なものを奪っていく。人は誰でも傍らにいて寄り添い語り合い支え合いたいのだ。そんな当たり前の心が当たり前にに満たされる日々が、早く戻ってきてくれることを切に願う。

（主　婦）

■ 佳 作

介護と新しい日常

外﨑　隆

身体障害者手帳１級ですが、幸い電動車椅子を利用すれば近場なら自由に移動でき有難いと思っております 。

週一度は図書館に通い、半日程度好きな本を読んで楽しみ、その帰り道に好物のパンを購入するのがささやかながら心待ちにするひとときでもありました。

ところがコロナウイルスの大流行により外出自粛が呼びかけられ、図書館も休館、パン屋さんも一時休業となり私も外に出る機会は通院時と週一度の入浴デイサービスの日だけとなりました。しかもデイサービスは時間短縮になり、在宅する時間はますます増えました。

仕方のないことだとわかっていても、この新しい日常に戸惑いはありました 。私がデイサービスを利用させて頂く日は、普段は私を介護している妻にとって 貴重な心身ともに休める時間であり、出かけている時に「30 分昼寝したら疲れが取れたみたい」とか、「時間があったからクッキーを焼いてみた」等、自分なりのペースで私の事を気にせず過ごせる宝物のようなひとときで機嫌よく留守だった時間のことを夕食を口にしながら報告してくれました。

不要不急の外出はお互いにしなくなり 顔を合わせる時間と介護サービスの短縮により 妻の介護料も少なからず増え それぞれストレスも 積み重なって行きましたが 出口が見えないコロナウィルス拡大に 私ども夫婦が考え方を変えるしかないと悟り始めました 。

外出は出来ないけれど週一度半日程度 顔を付き合わせないよう

にすることにしました 。図書館通いをしていた時のように水筒とおにぎりを用意してもらい自室から用がなければ 出ず、音楽を聴いたり読書をしたり独り時間を満喫するようにしました。この時ばかりは必要がない限り妻とあえて会話もしません。一方、妻は妻で私に声をかけられたり基本的に介助も私の昼食の準備もありませんので、じっくり趣味の家庭菜園をやったり、離れて暮らす実母と長電話をしているようです。最近は以前のように笑顔を見せるようになった気がします 。

介護サービス縮小部分は、どうしても、妻に負担してもらうしかありませんがその分楽チンにできることは何か、と２人で考えたところ、家事量を減らすことでした。我が家では新婚時から４半世紀以上同じ洗濯機を使って来ましたが、全自動乾燥機能付に買い替えをしたところ、洗濯の手間がだいぶ少なくなったし、天気を気にせずに洗濯ができストレスも減ったと大喜びしていました。同様な理由で掃除機も手動式の品から自動式のものへとしたところ肩こりが軽減されたとのことでした。私も正直、今までは洗濯機や掃除機の音が気になっていたのですが新しいものは静かで助かります。少々痛い出費でしたが給付金のおかげで家計負担は少なく快適さを得ることができました。文明利器を使って日常生活が楽になり家事の時間となりました。

コロナウイルスによって我が家の日常も、このように変化して行きました。介護とコロナウイルスと在宅による夫婦ストレスと上手く付き合う私たちなりの作戦です。コロナウイルス感染予防で今までのような楽しみは減り不便も増えましたが、少しでも負担を緩和し、毎日を無事に重ね合えるよう思いやりをもっていきたいとあらためて感じる日々です。　（無　職）

■佳作

みえないウイルスで見えたもの

小林浩子

昨年の春、秋田の叔母が脳梗塞で急に倒れた。近所の人が彼女の異変に気づき、四時間以内に病院に搬送したおかげで手術も無事に成功した。下半身に少し麻痺が残ったが、術後はリハビリを繰り返しながら回復をゆっくりと目指せば問題はないということだった。

東京にいる兄弟たちが姉の見舞いに秋田へと駆け付けた。気丈な長女とは言え、さすがに兄弟と久しぶりに顔を合わせると号泣した。妹である母は、今まで彼女が泣く姿など子供の頃から見たことが無かったので、ひどく心を痛めた。「どうしてこんなことになったのか」と、何度も言い続ける姉に、兄弟たちは、今は辛いがリハビリをすれば大丈夫だから、と優しく励ましの声をかけて病院を後にした。

数ヶ月後、叔母のリハビリは順調にいき、叔父からも喜びの報告を受ける日々が続いた。半年後、姉の体調はますます良くなっているだろうと思い、母が叔父に連絡を入れた。すると、最近はリハビリが上手くいかず、入院生活も予想以上に長くなり、八十代後半ゆえに物忘れの兆候が徐々に見られるとの悲しい報告を受けた。

叔母の体調が心配される頃、新型コロナウィルスの情報が国内に溢れてきた。中国武漢で新しいウィルス出現を初めて耳にした時は、どこか遠い世界の出来事だと高を括っていた。それがあっという間に世界中でウィルスは蔓延し、感染者増加や拡大傾向、都市封鎖のロックダウンと不吉な情報ばかりが飛び交った。そして、ついに火種は日本国内でも広がりを見せて、緊急事態宣言が発令された。叔

母の病院も外部からの出入り禁止を余儀なくされた。ほぼ毎日、病院に面会に訪れていた叔父は妻の見舞いに行くことも一切出来なくなった。九十歳近い叔父は妻が入院して以来、自分がしっかりとしなくては、ここでパートナーを支えなくてはと気丈に振舞っていたが、コロナウィルス感染拡大防止のための行動が制限されてしまい気持ちも塞ぎがちになっていった。

病院内にいる姉は一体どうなったのだろうか、と母は自粛期間にいつも心配していた。子供の頃から自分の世話をしてくれた逞しい存在が倒れてしまった。リハビリも思うように出来ずベッドの上で一日の大半を過ごすことが信じられず、不甲斐なかった。何とかして姉を救ってあげたいと願ったが、緊急事態宣言下で、自分自身の行動範囲までも制されてしまい、何をどうすれば良いのか全く分からなくなった。

新型コロナウィルスによって世界が一変した。人々に不安や恐怖をもたらした。いつ、ウィルスが収束するのか先が見えない。抗ウィルスの薬が研究されるとはいえ、それがいつ実現するのかが予測されず、果たして期待をしても良いのかさえ分からなかった。

入院生活を続けている叔母の様子が具体的に見えたのは、緊急事態宣言解除から。食欲が減り、かなり痩せてしまった。一日寝たきりのため物忘れも進行して、自分が病院にいること自体の認識もあやふやになってしまった。叔母にとって、優しく声をかけてくれる存在が欠けてしまった。毎日訪れていた叔父も、東京にいる兄弟も子供、孫も病院に足を運ぶことが許されない。

新型コロナウィルスとは、今まで見えていた人同士の繋がりを見えにくくしてしまった。しかも、皮肉なことに見えないウィルスによって。

ハッと気付いた。私たちは思っている以上に人との見える繋がりを必要としている。失うまでそれが分からなかった。もちろん、人との繋がりは大切だと頭では十分に判っているのだが、心から本当に理解しているのかと問われれば怪しい。

現在、叔母の面会は身内だけに限られるが再開した。時間限定ではあるが、オンラインでの面会も可能になった。すると、叔母の体調に目に見える大きな変化が生まれた。今まで減化していた食欲が戻りつつあり、声も少しだけ大きく出せるようになった。付き添いの看護師も確かな手応えを受けたと伝えてくれた。いつものように叔父が病院に通って声をかけることができる。「母さん、寒ぐねぇか」と方言を一言でも添えるだけでも温もりが届く。娘がオンラインの面会で遠距離から言葉を投げかける。叔母は自分の娘と、たった今、繋がっているという親子の安心感を大いに得られる。

新型コロナウィルスによって、私たちが失った代償は大きい。多くの人に様々なマイナス面をもたらした。でも、一見、マイナスばかりと思える状況にも必ずプラスの面は存在している。それを見つけようとする原動力自体が苦しい時こそ大切だと学ぶことが出来た。叔母の入院生活を通して、人との繋がりの不可欠さを大いに見せられた。そして、声を掛け合うことの素晴らしさに気づかされた。これからも、今後のウィルスの動向は依然として分からないままだが、前へと恐れずに進みたい。手に入ったプラス面に気付いただけでも、莫大な価値があると信じながら。

（家事手伝い）

あ　と　が　き

2020年度第22回「豊かな福祉社会を創るために」エッセイの受賞作品集をお届けします。

今回は副題を『新型コロナウイルスって何？』としました。「豊かな福祉社会」と「新型コロナによって影響を受けた社会や人生の諸側面」が２７１の応募作品それぞれの中で描写され、エッセイとして形を成しています。

恐ろしい感染症が蔓延しています。感染者となって病気治療という戦いだけではない、社会的な部分でもまた相応のエネルギーを必要とする状況になっています。街で人とすれ違う時もあたかもその人を避ける風にお互いに距離を開けるさまは、あたかも人々の連帯感が希薄になっているかのように見えるものです。家族に会うために帰省する、共に過ごす時とお互いの関係を再確認するために一緒に食事の時間を過ごすことなども出来ないようになってしまっています。

どちらかというと暗いそのような視点で応募された作品群かなと漠然と思っていました。しかし､むしろこの経験の中で何を得たか、との描写が多いことに驚きながらエッセイを味合わせていただきました。「感染したことを恥ずかしく感じる子たちを差別するのではなくどのように支えてゆくのか、と言う思索は、障害を持つ子が障害以外の社会的な所での支えもまた必要としていることと同質な意味を持つ」（「相手と向き合う」阿部百々さんの作品の一部を筆者が要約）」という深い洞察が高校生によってなされていることはある意味感動的でもあります。また、身内に認知症患者を持ったことがきっかけで高齢者施設に関わったところ、利用者さんたちの笑顔を得ることができた経験や、コロナを擬人化して幼い家族とほほえましい会話をしている様を付け加えて（「目と声と笑顔」東のぶこさんの作品の一部を筆者が要約）味わいのあるエッセイとしてまとめている筆力にも良い意味で驚かされました。コロナだからこそそれ

までに見ることのできなかった（芽の出なかった）「何か新しくて、良いもの」が見つかった、人との繋がりを絶たれたからこそ改めて気が付いたその大切さ、が多くの作品にみられる「逆境を単なる不幸とだけ受け取らないでその中で我々の復元力をどのように発揮させるか」の発想が、人類の力強さかと思わされました。

作品群からの高校生による表現をいくつか紹介いたします。（いずれも筆者による言い回し変更があります。ご容赦ください）

「福祉科で学ぶ私の観点からみて一番の心配は老人ホームでのクラスターの恐れです。」（筆者註：一定程度の専門性を身に着けたからこその深い意識からの言葉です。通り一遍の決まり言葉ではありません）

「介護の勉強と実習を通じて知識技術だけでなく、思いやりや温もり、優しさなどを学ぶことができました。」（筆者註：教室での授業を通してこういうことを学べる分野ってなかなかありません）

「私には運動を通して身につけたものと、福祉の勉強で身につけた知識技術の両方があるのでそれらを統合して私らしい関りを見つけたい。」（筆者註：学んだことを現場で繰り返すのではなく自分らしさをどう創ってゆくのか、というレベルにまで意識が行っている）

コロナの収束が見えませんが、そういう中でも日常生活は継続しますし、介護をやめることもできません。どのように生きてゆけば良いのか人類全体が模索している中で、若い世代が前を向いて自らの歩みを進めようとしている姿を見ると明るい未来を期待することができます。

東京 YMCA 医療福祉専門学校
校長　八尾　勝

第22回 愛恵エッセイ募集

豊かな福祉社会を創るために

新型コロナウィルスって何?

豊かな福祉社会を創るためにあなたの考えや思いを聞かせてください

応募方法

1. 応募締切 **2020年11月13日(金)必着**

2. 対　象
1)学生の部　在学中の方ならどなたでも。
2)専門職の部　福祉関係の仕事に従事している方。
3)一般の部　福祉に関する経験や分野は問いません。

3. 字　数 1,600〜2,000字

4. 体　裁
1)手書きの場合…400字詰めA4横書き原稿用紙を使用し、読みやすい字で濃く書いて下さい。
2)PC使用の場合…A4横書きで1ページを30字×26行に設定して下さい。

5. 表　紙
1)裏面の応募用紙に必要事項を記入の上、作品の表紙として添付して下さい。
(PC使用の場合、同様の内容を記載したものでも可)

6. 提出方法
1)郵　送…右記宛先へ郵送して下さい。
2)メール…右記メールアドレスにご送付下さい。その際メールのタイトルに「エッセイ応募」と必ず明記し、上記表紙の内容も一緒にご送付下さい。

7. その他 応募は、一人1作品、自作未受賞の作品に限ります。応募作品の返却はいたしません。お預かりした個人情報は本目的以外には使用しません。

賞

最優秀賞	各部1点	賞状と副賞(5万円)
優秀賞	各部3点	賞状と副賞(2万円)
佳　作	若干名	賞状と副賞(1万円)

＊受賞者は愛恵福祉支援財団のホームページにて発表します。(1月下旬予定)
＊受賞者の作品は「2020年度エッセイ集」に掲載されます。(事務局にて表記上の修正をする場合があります。)
＊後日、都内にて表彰式を予定しています。
表彰式については、応募された方に別途ご案内いたします。

主催:公益財団法人 愛恵福祉支援財団
共催:公益財団法人 東京YMCA

問合せ・応募送付先

東京YMCA会員部内「エッセイ募集係」
〒169-0051 新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館6階
E-Mail:kaiin@tokyoymca.org
TEL:03-6278-9071　FAX:03-6278-9072

“豊かな福祉社会を創るために”
— 2020 年度 愛恵エッセイ賞 受賞作品集 —

2021 年 2 月 29 日　第 1 刷 発行

主　　催　公益財団法人 愛恵福祉支援財団
共　　催　公益財団法人 東京 YMCA
発 行 者　公益財団法人 愛恵福祉支援財団
〒 114-0015　東京都北区中里 2 － 6 － 1
TEL 03-5961-9711　FAX 03-5961-9712
印　　刷　アーク印刷株式会社
〒 114-0024 東京都北区西ケ原 3 － 66 － 9
TEL 03-3915-4240　FAX 03-3915-4212

非 売 品